

4月から新年度が始まりました。私たち老夫婦にとっては、一年中、365 連休で、とても穏やかに、静かに日々を過ごし、もう大きい変化はありません。けれども、息子の家庭では、下の孫が大学生になり、息子の妻が教会の役員に、息子が団地の管理組合理事長に選ばれ、それぞれ、大きい責任を担うことになりました。それぞれの活躍を心から祈り、期待しているところです。



そういう忙しいスケジュールの合間を縫って、夫の回復と誕生日を祝って、パーティを開いてくれました。一時はもはやこれまでかと思った命が、守られて、皆喜んでくれました。とても嬉しく、このように家族に愛され、支えられている幸せを心から感謝しています。

イースターの礼拝では息子の妻が司式を担当し、友人がその折の写真を送ってくれました。初めてのお当番でしたが、いつものように落ち着いて、穏やかに、また、歯切れよく、明瞭な言葉で式を導いてくれたことでしょうか。このように奉仕する娘が与えられるとは、なんと嬉しいことでしょうか。かつて、私は息子の幸せを願う母として、「あなたと一緒に礼拝に参加してくれる人と結婚することが、あなたの最大の幸せよ」と絶えず言ってきたことが、叶えられたのです。



このように幸せに過ごしています。この喜びを噛みしめながら、ヨロヨロした足取りながら、進んで行きたいと願っています。また、与えられた恵みの時を有効に用いることができますように、と願っています。

まごまごしているうちに、天皇が退位し、皇太子が新天皇になりました。それに伴って政府が決めた元号は令和になりました。それに関連し、新しい時代が始まるとして、フィーバーしている人々の姿を映し出す報道が堰を切ったように流れています。一月前、元号の「令」の文字を見た時、「巧言令色すくなしに」という言葉と安倍首相の顔が重なるのを感じました。今朝の新聞の投書欄に 86 歳の男性が、「汝臣民和して朕が命令に服すべし」と読めたとありました。天皇の世紀である元号は、日本でだけ通用する暦ですから、私は使いませんし、天皇制そのものにも異議があります。天皇家の人々の幸いを心から願うものですが、天皇家の人々には人間としての自由も権利もないと思わずにいられません。戦前は「現人神」、戦後は「象徴」となりました。御所と呼ばれる住まいの中に自分の神殿を持ち、神主として祈ることが世襲の仕事です。「象徴」という名で規定され、国の権威づけに利用され、主権を持つ国民の上に立つのは矛盾しています。国民が等しく持っている職業の自由、信教の自由はなく、住居、結婚の自由など、様々な制限が見受けられ、気の毒です。古くから日本の文化を担った伝統は大きいものがありますが、過酷な歴史の闘いを経て、今は民主主義の時代になりました。退位ではなく、廃位にして、全ての人々が自由で平等に生きられる新しい時代を望みます。



イースターの礼拝の折に、ひとりの女性から今朝摘みましたと言って、四葉のクローバーをプレゼントされました。とても大きく、生き生きとしていました。嬉しくて、押し花にしようと、聖書に挟みました。草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。(イザ40:8)との聖書の言葉は真実だと信じています。私たちも草花のようにやがて枯れていきますが、神の言葉を聞くと、大切な人として、愛され、生かされていると実感します。新年度も、永遠に変わらない真理の道を歩んでいきたいです。